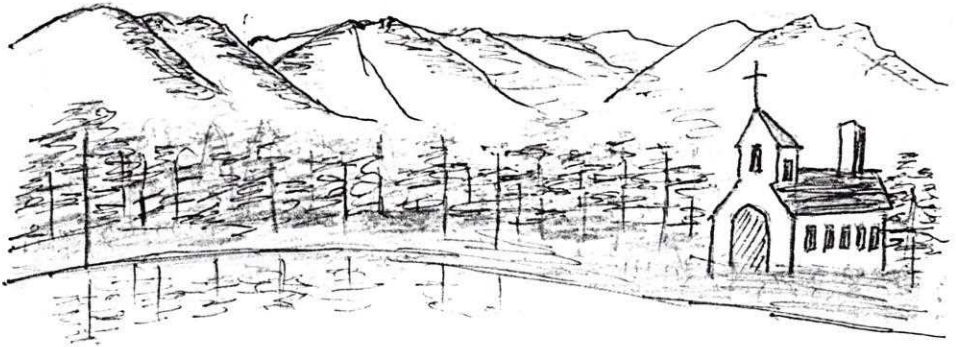




う 羽 化 が

1998年 8月
第 9 号

漢字点字協会
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
発行責任者 代 表 岡田 健嗣
編集責任者 宗 助 悦子



目 次

私と物語を結ぶもの（横浜市中央図書館 齊藤恵子）	1
中央図書館への漢点字訳書の納入について	3
連載「点字から識字までの距離」(8) (山内 薫)	5
雑感（山崎 君江）	7
教室から 学校は心の病院（伊藤 邦博）	8
連載マンガ「となりのシロー君」(8)	17
同報通信『雑感』より（西 淳策）	21
漢点字との出会い（木下 和久）	23
ボランティア“私”論（補記）（岡田 健嗣）	25
漢点字ってどんな字？ 8	29

今回は、横浜市中央図書館 障害サービス課に勤務しておられます、斉藤恵子様へ原稿を頂戴いたしました。

私と物語を結ぶもの

横浜市中央図書館 斉藤 恵子

指と耳でページを辿り、その本がつむぎ出す世界に飛び込んで行く。ときに笑い、涙し、時のたつのも忘れて夢中になる。そしてときには、声に出して表現する。私にとっての幸せな時間です。

私が本を愛し、さらに物語を表現することの喜びを知ったのは、いくつかの物や人との大切な出会いがあったからだと思います。その一つはなんといつても点字との出会いです。

小学校1年生が使う教科書は文字も大きく挿し絵も多いため、強度の弱視である私の目でもなんとか読むことのできるものでした。しかし、すぐに拡大教材が必要となり、一字一字をひしひしに追っていくことがとても面倒に思えてきました。現在のように様々なタイプの拡大読書機があれば、墨字を使い続けて漢字をもっと良く知ることができたかもしれないという後

悔もないわけではありませんが、点字を覚え読むことも書くことも大好きになれたことに今は感謝しています。点字という未知のものを獲得していく過程がとてもわくわくするものであったこと、初めて点字で教科書を読んだこと、タイプライターを使ってすららと文章が書けたこと、どれも忘れることのできない喜ばしい瞬間でした。

点字離れが叫ばれるようになって久しい現在、私自身もついつい録音図書やパソコンの音声に頼りがちではありますが、それでもやはり点字は大好きです。様々な条件はあるでしょうけれど、ぜひ一人でも多くの人（特に視覚障害者自身）に素晴らしさを知ってもらえたらと願っています。

さて、もう一つの出会いの方に話を進めることにしましょう。先程書きましたように、私は今、物語を読むだけでなく言葉で表現する楽しさに取り付かれています。それに繋がると思われる出会いについてです。

それは、何人もの登場人物を見事に演じ分けるといふ、当時の私にとってはまるで魔法のような力を持つ先生との巡り会いでした。本来私たちを教えるべき先生が出張などでいらつしやらないとき、しかも決められた課題がないという稀な条件が重なったときにだけ、そのチャンスはやってくるのです。ときどきしか聞

くことができなのがとても残念に思えてならないほど、いつまで聞いていても飽きるほどのないものになりました。私もいつかこんな風に豊かな表現ができるようになったらどんなに楽しいことだろうと、あこがれのよ
うな気持ちを抱いていました。とはいえ、この思いは心の奥にはあるものの忘れさられたものになりつつありました。

ところが、思いもかけないきっかけから、あるグループの皆さんと出会い再び思い出すこととなりました。そして今正に表現する喜びを味わっています。それは、「こうばこの会」という視覚障害者を中心としたトークパフォーマンスのグループで、年に数回行なわれる公演でそれぞれ思い思いの作品を演じています。私も1年と少し前にそのお仲間に入れていただき、舞台にも立たせていただいています。

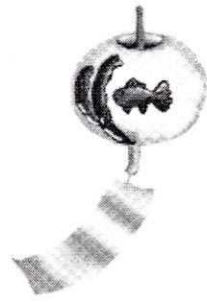
このグループの結成は約5年ほど前で、自分の言葉を用いて物語を表現することに興味を持った数人の視覚障害者が細やかに始めた会だったようです。名前の「こうばこ」とは、お香を入れた箱のことで、素敵な香りのお話で聞く人を心地よくすることができたら、との意味を込めてつけられたものだそうです。

舞台上で演じられる物語のジャンルは実に様々で、民話の一人語り、宮沢賢治などの名作、現代社会のいろ

いろなテーマを扱ったオリジナルの作品などなど、最近では数人で語る楽しいものも増えてきています。メンバーはそれぞれに仕事その他の活動をしながら練習に取り組む素人ですので、技術的には未熟さを隠すことはできませんが、音響や照明などで協力して下さる方、そして会場へ足を運んで応援して下さい下さる方々に支えられて、公演を続けることができます。

こうした援助を受けながらではありませんが、チャリティーという形でほんの少しの社会貢献ができる喜びも味わわせていただいています。普段はなかなかできない大きな声で思い切り表現し、お客様から拍手をいただくという経験。そして、その活動を通して細やかながら役立つことができる。このような機会に恵まれたことをとても嬉しく思っています。

これからも一冊でも多くの心暖まる本とお話に出会えることを願いつつ、拙い筆を置かせていただきます。



中央図書館への漢点字訳書の納入について

今年度も、横浜市中央図書館へ2作品の漢点字訳書の納入が決定いたしました。

ここに、簡単な作品のご紹介をさせて頂きます。

新谷課長初め横浜市中央図書館のご厚意に感謝致しますと共に、漢点字を学んでおられます皆様にご利用頂けますことを心より願っております。

1 大岡 信編『現代詩の鑑賞101』新書館刊

本書は、一九九六年九月二十六日に初版発行されたものを漢点字訳するものです。

これは、新書館ハンドブックシリーズの中の101シリーズの一つとして、大岡信氏によって編まれました。

以下に目次の一部及び本文をご紹介します。

〈目次〉

及川 均 わきめもふらず。ジグザグに。
石原吉郎 葬式列車／足利

黒田三郎 賭け／秋の日の午後三時／誕生日
吉岡 実 過去／僧侶／サフラン摘み
宗 左近 来歴

及川 均 一九一三・二〜一九九六・一

わきめもふらず。ジグザグに。

生きてることの徒労のために。

まず一杯。

ウラニウム状の夜ともなれば。

ころもとなくなりますからね。

焼鳥。煮込み。ひややつこ。

正陽門外正陽楼の烤羊肉チンヤンメン外正陽楼の烤羊肉といきたいが。

どうにも輓近きゆうくつで。

ご存知のように不如意不随意。

しばらく軒昂を祝うには。

決してこれにかぎりません。

2 新潮社100年記念 「新潮」7月臨時増刊

新潮名作選 百年の文学

本書は、「新潮」一九九五年七月臨時増刊として発行されたものを漢点字訳するものです。

以下に、原本の構成をご紹介します。

〈小説〉

身上話（森鷗外）／和解（徳田秋声）／伸び支度（島崎藤村）／口入宿（正宗白鳥）／ADIEU（わかれ）（永井荷風）／好人物の夫婦（志賀直哉）他

〈評論・エッセイ〉

鉄火と詞華と（田口掬汀）／内村鑑三と木下尚江（中里介山）／批評家の立場（夏目漱石）／言文一致論（尾崎紅葉）／おぼけずきの謂れ少々と処女作（泉鏡花）他

〈追悼文〉

島木健作追悼（川端康成）／不良少年とキリスト太宰治（坂口安吾）／敗荷落日 永井荷風（石川淳）／白鳥の死 正宗白鳥（深沢七郎）他

〈新潮名詩選〉

放埒（北原白秋）／大砲を撃つ（萩原朔太郎）／疾風（伊藤静雄）／午後の地図（瀧口修造）他

〈コラム傑作選〉

新聞岡目八目（中野好夫）／「異邦人」を読む（阿部知二）／トルストイの「ルツェルン」（武者小路実篤）他

〈二頁近代作家論〉

森鷗外（吉村昭）／夏目漱石（保坂和志）／徳田秋声（佐伯一麦）他

〈合評会・鼎談〉

創作合評 凶災後の文芸時事六項（抄録）（徳田秋声・芥川龍之介・菊池寛他）

鼎談 詩の生命

（高村光太郎・三好達治・草野心平）

鼎談 文学と人生

（小林秀雄・中村光夫・福田恆存）

点字から識字までの距離（八）

山内薫（墨田区立緑図書館）

「拡大写本」は一般にまだ、ほとんど認知されていない。そのために弱視の人たちも拡大写本の存在を知らないというのが現状である。図書館というレベルで見ても、点字図書館で拡大写本を資料として取り扱っているところはほとんどないし、障害者サービスがかなり進んでいると見られている東京の公共図書館でも、拡大写本を所蔵しているところは僅かに一五館で、その内一九九七年度中に貸出を行った図書館はたった三つの図書館にしか過ぎない。一方、拡大写本サービスと云って、利用者からの拡大写本の希望を受け付けている図書館が七館あって、そうした図書館では、多くの要望が寄せられていることが分かる。その中身は、教科書を初めとして「CDの曲名や解説、教会の礼拝用のテキスト、ガイドブックなどの生活情報、カラオケの歌詞、三療関係の個人のノート、商法の一部、NHKのテレビ英会話のテキスト」など多岐に渡っている。そこでの特徴は、本というよりは、ごく身近な情報が多くを占めていることだ。

さて、墨田区の図書館では今年四人の中学生の拡大教科書を作成しているが、その内の一人、A君の場合

には、小学五年生の時から拡大教科書を作り初めて現在に至っている。彼の視力は小学校入学前に〇、〇一で、就学指導委員会では盲学校で教育を受けることが適当であるという結論を出したが、彼は二学年上のお姉さんと同じ学校へ行きたいと統合教育を望み、ぎりぎり地元の学校への入学が決まった。両親は彼の残存視力を生かして墨字で勉強することを望み、隣の区の弱視学級にも行ったそうだが、結局彼の視力では弱視教育は無理と言われ、受け入れてもらえなかった。当時彼に図書館まで来てもらって拡大写本を見てもらったのだが、日常の学習を墨字で処理していくのはかなり困難であることが分かり、結局点字を覚えてもらうための集まりを持つことにした。墨田区の図書館では、以前にも全盲の子どもが小学校で統合教育を受ける際に数力月間点字の指導をしたことがあるので、その時の経験者や当時の彼の担任、両親などに集まってもらって点字の指導が始まった。

地元の学校へ行った彼は、近所の子と友達になり、お互いの家でファミコンに熱中するようになる。今までテレビにもほとんど興味を示さなかった彼がファミコンを覚えてから見ることに興味を示すようになり、しばらくすると、視力が〇、〇一から〇、〇三にまで上がったという。点字の指導は数力月で終わり、その

後図書館への連絡は途絶えていたが、彼は四年生から隣の区の弱視学級に週何回か通級するようになり、五年生になる直前に弱視学級の先生から図書館に拡大教科書を作成して欲しいという連絡があった。そこで彼の両親と弱視学級の先生に図書館まで来てもらい、いろいろな見本を見てもらって、一番見やすい字の大きさを選んでもらったが、それはおよそ一二から一四ミリ角の字で、B四判の用紙一杯に書くことになった。五年生では国語と算数、社会を手書きの拡大写本で作成したが、六年生の教科書を作成する段になって、再び字の大きさを決めるために図書館に来館してもらったのだが、一年間拡大教科書を使って見ることに慣れた彼は面積比で二分の一の大きさの文字でも読めるようになつていた。彼自身がワープロを使って打ち出し、読むことができると言つて持ってきた文字は八ミリ角の力ナであつた。このように、彼の場合には目を使えば使うだけ視力が上がり、六年生では理科の教科書も手がけることになつた。この年には国語と算数が手書きで社会と理科はワープロを使って拡大教科書を作成したが、どちらかという手書きの方が読みやすいという感想だつた。弱視学級の先生によれば、拡大教科書による学習は、テレビ型の拡大読書器やルーペなどを使って学習するよりも三倍から四倍も効率よく学習

できると話していた。

彼のように点字と大きな文字の間を行き来している弱視の人を現実に見ると、まだまだ多くの弱視の人が大きな文字の教材や資料があれば視力を生かして読むことができるのではと、思わずにはいられない。しかしこれは単に拡大教材や拡大写本のことだけではなく、考えてみれば漢点字資料についても全く同じことが言えるのではないだろうか。拡大写本同様、いやそれ以上に漢点字は、一般に認知されておらず、PRもされていらない。漢点字を打ち出すことのできる公共図書館となると、おそらく日本全国で緑図書館だけだろうと思う。今後、漢点字を知らせ、その必要性を訴えていくためには、拡大写本同様、公共図書館が率先してその役割を担わなくてはならないだろう。

ある弱視の人に言わせると、弱視者の九七%の人は、本を読むことに関心がないか、本なんか見たくもない人だと言う。それは例えばマンガとか、SFなど読みたいものが気楽に読める文字の大きさを揃っているという環境のないことが一つの原因だと言う。同じように漢点字で読みたいものが読める環境が少しくずつでも整備されることがまた漢点字の普及に不可欠なのだろうと思う。(勿論漢点字の場合には気軽に読めるといふ要素だけの問題ではないが・・・)

雑感

會員 山崎 君江

現在、私は、2つの異なったボランティアグループに所属している。一つはこの漢点字羽化の会であり、もう一つは音声訳・朗読録音のグループである。

長年、仕事人間であった私は職を辞めるにあたりこれから私の出来ることは何か？ なにが私に出来るか？ そしてそれがどなたかの役に立てれば私にとりより嬉しい！ と素朴にそして漠然と考えていた。

最初に考えたのがパソコンである。在職中の私は、提出書類や論文を書くのにパソコンは必需品であった。このパソコンを使って、何かできないかと考え、情報を得るのに区の福祉課を訪れ、私の主意を伝えなが満足する答は返ってこなかった。判った事は、漢字の点字は非常に特殊であるという事であった。点字について無知であった私は仮名点字が主流で漢点字が特殊であるということすら知らなかったのである。私は、漢点字のソフトが既にピピュラーに存在していると思っていたのがどうもそうではないらしい。ショックであった。

その時福祉課でたまたま目に止まったのが、朗読・録音の入門講座開講の知らせであった。よし、一まづ

これから始めようと受講し、活動を開始した。それから暫くして漢点字の講座が開講されることを知り、強引に教室に潜り込み受講することとなる。少しはパソコンのこと判っていたつもりだったがなんともちんぷんかんぷんの自分に冷や汗たらたら日々ではあるが現在に至る。

2つの活動は、墨字を音に訳すか、点字に訳すかの違いはあれ、意としていることは同じである。しかし与えられた作品を正確に訳す事の難しさを痛感している。漢字は象形文字であり漢字そのものが意味をもつ。私達晴眼者は、漢字を見ただけでその漢字のもつ意味を理解するよう子供の頃から訓練されてきた。視覚障害者の方の中には漢字を全く見た事のない人もいる。耳で聞いただけでは理解しにくい語は、言葉を補い説明を付け加えて、意味を正確に伝えられるよう努力している。例えば、文中に水田址とある場合、すいでんしのしは土編に停止の止、意味はあと、とつけ加える。人並の教養は身につけていたと思っていたが、いやはや、ポロリポロリとはがれ落ち、冷や汗たらりの日々ではあるが一つ一つの活動を楽しく学びながら過ごしている。いくつになっても学ぶという事は楽しいものである。

江戸川区の小学校で教鞭をとっておられます伊藤邦博先生から今回も原稿を頂戴しました。本号と次号に分載させていただきます。誠にありがとうございます。なお本誌へのお手紙が添えられておりますので、その一部をご紹介させていただきます

(前略)

今、教育という仕事について、私が関心のあるのは

詩 子ども 心 ことば 生きる

ということですが。

今回はこれらの五つのキーワードを網羅した昨年のクラスの子どもたちの5年生の時のドラマについて書いてみました。

私の、想像を越えるドラマでした。生きることに悩んでいた学級の子どもたちが大きく成長するターニングポイントにもなりましたし、私自身にとっても、多くのことを教えられ、考えさせられることになった忘れられない出来事でした。結果として長編になってしまいました。

私は子どもたちに 事実を見つめ思いを綴ることができ表現者であって欲しいと願ってたくさんの詩や作文を綴らせてきたわけですから、私自身も表現し続けなければなりません。去年担任していた子どもたちへのメッセージと

いう意味も込めて今回の原稿を書いてみました。

今回の原稿では子どもたちは実名で登場しています。子どもたちの許可はとってあります。子どもたちは二つ返事で了解してくれました。

(中略)

岡田さんに「騙されて」始めてこの仕事、自分の仕事を捕らえ直しながら、考え、整理できます。ありがたいことだと思っています。

教室から

学校は心の病院

小学校教師 伊藤 邦博

1 ドرامマは『くりかえす』から始まった

十二月のある日、久し振りにクラスみんなで詩を音読しようということになりました。

私のクラスでは学校教材用の光文書院発行の音読詩集を児童全員に購入してもらっています。時々これを取り出し、詩をクラス全員で声に出して読むことを楽

しんできました。この日は谷川俊太郎さんの詩『くりかえす』を読むことにしました。子どもたちに『命』について考えてほしいという願いが私にはありました。

くり返す／谷川俊太郎

くり返すことができる
過ちをくり返すことができる
くり返すことができる
後悔をくり返すことができる
だがくり返すことはできない
人の命をくり返すことはできない
けれどもくり返さねばならない
人の命は大事だとくり返さねばならない
命はくり返せないとくり返さねばならない
私たちはくり返すことができる
他人の死なら
私たちはくり返すことはできない
自分の死を

詩の大意の読取りをし、その後でクラス全員で音読しました。列ごと、男女別、班ごとにフレーズを分けたりして読みました。その後で子どもたちに問いかけ

ました。

「みんなが『命』を感じた時ってどんな時かしら、それを詩に書いてみよう。」

子どもたちはエーッとという顔をしつつ、悩みながら詩のノートに綴り始めました。

お母さんが入院、手術した時の心配と不安の気持ち綴った作品、ペットの死を切々と綴った作品、弟の病気の時の自分の心の中を綴った作品など読み応えのある作品がたくさん生まれました。

次の作品が目にはいつてきた時には、びっくりしました。胸が激しく鼓動しました。体が震え、申し訳なさに胸がつまりました。

2 外でたくない

外でたくない／越塚 美希

そろばんにいく途中のできごとだ。

「テーブル」上の方から聞こえた。

するとそこには女の子が二人か三人いて、

笑って私の方をみている。マンシヨンの上の方から。

私はこわくて自転車のスピードをあげ、にげた。
最近はなくなってきたが

ちよつと前までこういうことはよくあった。

たとえば：

中学生か高校生が、私の方を見て何か言いながら
笑っているなんてのはしよつ中だった。

それから今はもう中学の人だと思うが、
やっぱりこれも帰り道。

その人は四人くらいの女の子（その子も女の子）と
一緒にいた。

私は一人だった。

私がちよつと後ろを向くと私のこと見て、
その人は　こんなことをいつていた。

「あのさあ、いっっちゃあ悪いけど、

太っている人つて首ないよねえ。私もそうかなあ」
それを聞いて、私は小走りにそそくさと家に帰った。

何となくこわい気持ちになったからだ。

そんなことから親しくない年上||こわいという
イメージができてしまった。

弟を迎えに行く時、

上中の前を通る時中学生が出てくると、
わざと下を向き一気に通りぬけるようになった。

友達いけると友達の後にかくれてしまう。

一人の時でもかくれ場所があればかくれてしまう。
一時期だれにもいわなかったが、部屋に閉じこも
うとしたことがある。

けれど実行しなかった。

学校にいけば、体型のことなんて忘れさせてくれる
友達がいっぱいいいたからだ。

ごく少なくて泣いても、その時私は弱くて
何かいわれると泣いてしまうことがあった。

そんな時は、必ず「だじょうぶ」といつてくれる
人がいた。

皆が皆、私に対する対し方は同じではなかった。
男子はその時まで小さかったのといつていたが、

今はもう大きくなったのでいう人はいない。

そんなことで私は学校にもこれた。

でも中学生とかがこわいのはなおらない。
けれど、私のことを気にしてくれる人もおぜい
いる。

だれかに体型のことではげまされる時いつも思っ
よかったな、もし命がなく、私がいなければ、

こんな人たちにあえなかつただろう。
こんなに大事にされなかつただろう。

学校にこなくなつて死のうなんて考えていたら…、
などと考えてみれば、

命があつて本当によかつた。

命は誰かを大切にしたり、

誰かに大切にしてもらつたり

できることもあるんじゃないかと私は思った。

私は越塚さんを入學以來、五年間続けて担任してきました。元氣いっぱい頑張り屋さん、いつも一生懸命学習する子です。常に自分らしく自然に振る舞い、友達にはどこまでも優しい子です。私の体調までも気遣ってくれる子です。そんな彼女でしたから、昨年も今年も私のクラスでは皆から絶大の信頼をえていました。

例えば クラス全員と担任の私をそれぞれ一行詩で表現した池田祐子さんの詩『私の友達』には、このように書かれていました。

「越塚 みき あだなはみきボー みんなの質問なんでも答える先生以上の大先生」

みんなの質問とは学習にとどまらず、様々な相談や悩みごとまでも含んでいます。越塚さんはまさに「先生以上の大先生」的存在になっていました。

私は越塚さんを五年間連続して担任をしてきました。しかし、彼女にこんな絶望したことがあつたことなど考えたことがありませんでした。

二年生の頃お母さんから「外に出ないんです。」という相談があつたこと、四年生になつて弟を保育園に迎えに行くことがいやなんだと言つていたこと、五年生の時の保育園に弟を迎えに行つた帰り道、弟にあたりちらしてその後でいたく後悔したことを綴つた詩があつたことを思い出しました。

しかし、彼女は私の前では辛い姿は一度もみせたこととはありませんでした。

二年生の頃から傷つき、ずっと悩んでいたんだ、どれほど辛かつただろう、苦しかつただろうと考えるとたまらなくなりました。越塚さんに申し訳ない気持ちでいっぱいになりました。自分の鈍さに腹が立ちました。そんな私の思いを赤ペンで書き込みました。

同じ日のノートには次の詩が書かれていました。苦しみの深さに息がつかまりました。

姉／越塚 美希

計測の日。

ああゆううつだな。

熱があるって休めばよかった、
などと考えているうちに

うちのクラスの番がまわってきた。

女子はともかく、男子には聞かれたくなかった。

ところがその日はどういう理由か女子が先にされた。

私はゾツとした。

とてつもなくこわかった。

いやだ！男子先にしてよ。

心の中で叫んだ。

女子が先なので、男子に体重を聞かれた。

私はそれだけで

ドヨンと心の中が曇り空になっていた。

不幸はそれだけでは終わらなかつた。

帰りのことである。

きつと今の六年生だと記憶にある。

「おい、おまえ〇〇kgだろ。」

なんで知ってんの……。

涙が出そうになった。

ものすごいシヨックだった。

私は思った。

うちのクラスの男子の誰かがいったんだろうと……。

私の心は台風になっていた。

私は体重をいわれ、

くやしさと悲しさとはずかしさを
背負つてとほとぼ家に帰つた。

家に着くとそれまでがまんしていたものが

一気にあふれてきた。

もうやだ。

死ぬ。

きつと明日学校へ行つたら冷かされる。

好きで太つてるのじゃないのに。

そう思いながら泣いた。

いつまで泣いても止まらなかつた。

すると姉が帰ってきた。

姉は「どうしたの。」と聞いた。

私が「計測いやだ」と言いながら泣いていると、

姉が私を抱き、姉も泣いていた。

その瞬間

私はなんでお姉ちゃんも泣くの？と思った。

けれど、姉がそういう行動をとり、

ついちよつと前まで死ぬと思つていたことを

そんなことしても何にもならない、

自分が悪いんだ、

やせればいいんだと思つた。

この時、私は死ぬなんて思わず、
命があつたからこそ。

こんな私でも心配してくれる人がいれば、命をうしなわなくてすむと思つた。
もう姉は忘れてるが、このことがなかったら、私はいなかったかもしれないという大切なできごとの物語。

3 推敲そして授業へ

私はひとりひとりの子どもたちすべてが自分を見つめ、優しさや暖かさをわかち合い、自分で考え、行動できる子になってほしい、自分の心と友達の心を響かせあえる関係をつくってほしい、人の表情や思いや行動を傍観者にならず、善い悪いの判断をしないで受け容れ、わかろうとしあう姿勢を持つてほしいと願っています。私自身もそういう人間になりたいと思っています。

越塚さんに応えるにはどうすればよいか、悩みました。結論は彼女の詩を教材として授業を作りだすこと。彼女の詩をクラスの皆で読みあつても、今のクラスの子どもたちなら越塚さんの辛く、悲しい体験とそこから紡ぎ出した彼女の思いを理解し、考え、きちんと受けとめきつてくれるだろうと思えました。

また、クラスの皆で読むことで、生きるということ、人は互いに支えあうということ、自分を表現するということ、人を受け容れるということ、人の痛みを感じること、人と交わるということ、心を開くということについて考え合うことができるのではないだろうか。そして人と人との間に本当のぬくもりがあると人は生きる力を持つことができるということを伝えられるだろうと考えました。

一方で越塚さんには辛いかもしれませんが、彼女の思いがもつともつと鮮明に表現されるように推敲させたいと考えました。

翌日、その旨を越塚さんに話しました。

「あなたの詩をみんな読んで読んで学びあいたいんだ。それとあなたの思いをもつとはつきりさせ、読み手に伝わるように始めの詩を推敲してほしい。」と。

越塚さんは目に涙をいっぱいためながらも了解してくれました。

早速推敲の作業をしてもらうことにしました。越塚さんの目からは涙が止めどなくあふれてきました。子どもたちはいつもとちがう越塚さんの様子を見て怪訝な顔をしましたので、相談室で一人推敲の作業をしてもらいました。私は教室で授業をしながら、時々彼女の様子と推敲の進捗状況をみるために相談室を覗きに

行きました。涙で顔をグシヨグシヨにしながら2時間、完成したのが次の作品です。

外でたくない／越塚 美希

四年のころ、そろばんにいく途中のできごとだ。

「デープ」

上の方から聞こえた。

するとそこには女の子が二人か三人いて、

笑って私の方をみていた。

マンシヨンの上の方から。

私はこわくて自転車のスピードを上げ逃げた。

最近はなくなってきたが

ちよつと前までこういうことはよくあった。

たとえば：

中学生が高校生が、私の方を見て何か言いながら

笑っているなんてのはしよつ中だった。

それから今はもう中学の人だと思うが、

やっぱりこれも帰り道。

その人は四人ぐらいの女の子と（その子も女の子）

一緒にいた。

私は一人だった。

私がちよつと後を向くと私のこと見て、その人はこんなことをいつていた。

「あのさあ、いつちゃあ悪いけど、太っている人って首ないよねえ。私もそうかなあ」

それを聞いて私は小走りにそそくさと家に帰った。何となくこわい気持ちになったからだ。

そんなことから親しくない年上Ⅱこわいという

イメージができてしまった。

弟を迎えに行く時、

上中の前を通る時、中学生が出てくると、

わざと下を向き一気に通りぬけるようになった。

友達といると友達の後にかくれてしまう。

一人の時でもかくれ場所があればかくれてしまう。

一時期だれにもいわなかったが、

部屋に閉じこもろうとしたことがある。

けれど実行しなかった。

学校にいけば、

体型のことなんて忘れさせてくれる

友達がいっぱいいいたからだ。

ごく少なくて私の体重や体型のことという人がいたが、

その頃の私は弱くて

何かいわれると泣いてしまうことがあった。

そんな時は、必ず

「だいじょうぶ」

といってくれる人がいた。

皆が皆私に対する対し方は同じではなかった。

男子はその時まだ小さかったのと言っていたが、

今はもう大きくなったのという人はいない。

そんなことで私は学校にもこれた。

でも中学生とかがこわいのはなおらない。

けれど、私のことを

気にしてくれる人もおおいいる。

だれかに体型のことではげまされる時いつも思う。

よかったな。

もし命がなく、私がいなければ、

こんな人たちにあえなかつただろう。

こんなに大事にされなかつただろう。

もし学校にこなくなつて、死のうなんて考えていたら……。

命があつて本当によかった。

誰かを大切にしたり、

誰かに大切にしてもらつたり、

誰かを守つたり

誰かに守ってもらえたり、

誰かを助けたり

誰かに助けてもらつたり

命はどんなことにも負けない力があるものなんだ。

4 授業

翌日この詩を印刷して授業に入りました。

越塚さんに音読してもらおうとしましたが、止めどなくあふれ出る涙のためにそれは叶いませんでした。

この授業の始めから終わりまで彼女は机にうつぶして泣きじゃくっていました。

子どもたちに黙読してもらつた後で、私が一度音読し、感想をたずねました。たまたま目が合った長澤さんを指名しました。私も背が小さいといつてからかわれてすごく辛かつたことがあるという話をして泣き始めてしまいました。転校してくる前の学校で「中国人帰れ」といわれた経験を語る中国残留孤児を両親に持つ井上さん。私も太っていることからかわれたことがあるから美希ボー（五の1では皆が越塚さんのことをこう呼んでいます）の気持ち痛い程わかると語り

だした神尾さん。台湾生まれの両親をもち、私には美しいと思う本名をからかいの材料に使われ辛かったと話した陳詩怡さん。発言する子の目にも発言しない子の目にも涙がいっぱいあふれてきました。机にうつぶす子、泣くのをこらえようとしても、こらえきれずに泣き出す子。教室中が女子の泣き声でいっぱいになりました。教室は異様な雰囲気になりました。

そんな中でいつもは賑やかな男子もみんな神妙な顔つきをし、深く考えこんでいました。何人かの男子が「僕は軽い気持ちで友をからかったことがあるんだよね、けど今になってやばいことした、申し訳ないことしたなっと思うよ。」という趣旨のことを語りだしました。

差別的なことをいわれて自分も辛い経験をしたのに、差別的行為をしていても簡単に加害者になってしまったことを発表する子も出てきました。

この子たちは皆これほど傷ついた体験をしてきたこと、それを心の奥深くにしまい込んでいることを今更のように知りました。だからこそ越塚さんの作品をきちんと受けとめ、自分のことのように感じ、考えてくれたのだ思いました。皆がそれぞれの経験や意見を述べあつてこの時間の授業を閉じました。

しかし、確実に手応えを感じました。皆が辛い体験

を語ったことは越塚さんにとって無上の励ましになっただろうと思えました。男子が過去の自分の経験を見つめ、的確な言葉に出してくれたことも収穫でした。元氣いっぱい、優しさいっぱい、頼りがいのある越塚さんにもこんな絶望的な出来事があったこと、それを今までだれにも話さず（後で聞くと、親にも話さなかつたそうです。）心の奥にしまい込んでいたことから人間は表面に表れたことだけではその人を理解することはできないことを学んでくれたのではないかとも思いました。自己開示する勇氣についても考えてくれただろうとも思いました。

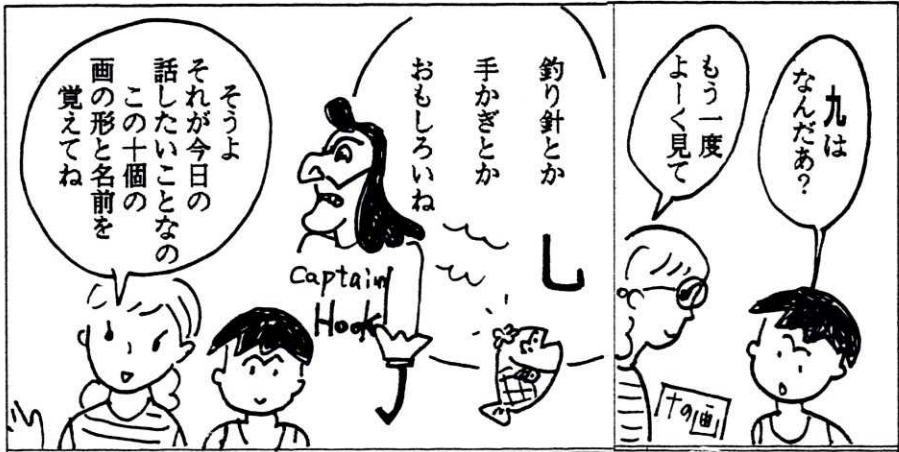
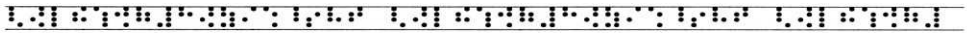
（次号に続く）



となりのシロ-君(8)

十個の画と名付け







会員 西 淳策

私だけが二人を残して先に帰国したのは昨日（7/23）から関西方面へ泊りがけで出張する必要があったからである。妹の家に預けた母の引取りを延長して僅か一日ではあるが、わが家をまたも空にしてのいまだ疲れもとれぬうちの旅となった。

海外旅行の話はひとまずおいて、この一泊の旅に触れる理由は、一か月近くの外国帰りの時差ボケからいまだ醒めやらぬ中での国内の旅が、いつもとは違った心境にあることを感じて、帰りの新幹線の中で車窓に流れる日本の景色を眺めながら、つい書きだしてしまつたというわけである。

往路、新幹線で西明石まで直接行けばいちばんよいのだが、その駅にとまる列車は少なく新神戸で乗換えようとして、改札員に従来線への接続を尋ねたところ、地下鉄で三宮まで行き、そこからJRに乗換えることとなつた。待つ時間が長くてもそのまま「こだま号」を待った方が結局は速かつたようだ。前にそのやりかたをやつたのである。新横浜で乗車して最初は新聞だけは目を通したものの、あとはぐっすり、京都

のアナウンスを聞いてはつとし、新大阪で降りかけもした。第一、新神戸で新大阪のようにJR線に直接接続していると錯覚をしていたのである。いつものそっかしさに時差ボケが加わりもう救いようがない、神戸の地下鉄に乗るのも経験と開き直ることにした。

しかし、考えてみるとこれは一つの機会ではあつた。起きてからかれこれ三年半にもなつてはいるが、あの関西大震災後の様子を一目見たいと前から思つていた新幹線では神戸付近はトンネルに入つてしまつて、街の様子はこれまで一度も目にしていなかつたからである。ところが、驚いたことに三宮で駅前の周辺を眺めてみても、林立するビルなどからは震災の傷跡は殆ど見受けられないのである。記憶に鮮烈な震災直後のテレビや新聞の写真等での衝撃的な惨状からは想像もできない姿である。これは三宮から神戸を通る高架のJRから眺めた沿線の様子もほぼ同様であつた。正直、ちよつと拍子抜けの感があつたが、三年半も経てばこんなものかもしれない。それにしてもこれは逆の変わりようと言つてもよいだろう。

一泊の夜、炬端焼きで一杯ご馳走になつた相手が被災者であつたので、このことに触れてみた。新しいビルは震災後に立ち上がったものであり、古いものは無事に残つたもので、ところどころの空き地は倒壊した

跡地で、建設中のも見られる筈とのこと。残骸の片付けに補助金が出る期限が三年とかで、それで処理が速まったということであった。ご本人は西宮に住んでいて、家は倒壊はしなかったものの30度ばかり傾いてしまったそうで、近所の家の一階がつぶれて、中に閉じこめられた老人を救い出す奮闘ぶりをつぶさに聞いて今更ながら、その大変さが窺えた。6時少し前のその瞬間は本人トイレにあり、突然の大揺れで天井に頭をぶつつけた由。奥さんは早起きのご主人につられて、体を起こした瞬間に発生、書棚が倒れたが、寝たままだったら下敷きになったところの危機一髪だったそうだ。

運良くすぐ貸家が見つかってそれが現在の仮の住まいだが、公営住宅の申込をしているものの未だに当たらずにいるとのことである。国の援助もようやく具体化しているようだが、これまで貰ったのは例の民間義援金の30万円だけだという。我々も僅かながらも協力したと言ったらお礼を言われてしまった。国の援助に対しての要望に私も署名をしたが、なんとか早く進めて欲しいものだ。

私は十年以上も前に赴任で阪神芦屋の单身マンションに暮らしていたことがあった。その付近も甚大な災害を受けていたことをニュースで知って、かなり時間

が経ってしまったが持ち主の奥さんに電話で連絡をとることができた。それによるとマンションは新しい鉄骨造りで無事だったが、その持ち主の旧家屋である母屋がつぶれたという。本人は早く起きて二階に上がっていて助かったが、ご主人は寝たまま家具の下敷きになって亡くなったことがわかった。ご主人とは当時一度だけだが、六甲山に一緒に登ったことがあり、その思い出は悲しいものになってしまった。

話は横にそれるが、大阪在勤中、休みの度に六甲山をいろんなルートから登ったものだ。ご承知のように、六甲山は車やバスが通っている観光地の山だから、徒歩で上まで登ると舗装道路に走る車と出会うほとんどにばかばかしい感じがする。だが各所からの登山の道は意外に山深く、自然に溢れているし変化も多く飽きないのである。登るルートをその度に変えて、地図に新たに赤線を入れる、ゆくゆく全山を網羅するのを目標として、楽しんでいた。それが未完のまま途中で帰任することになり、嬉しくも残念であったことが今でも思い起こされる。ついにながら、その間別に奈良方面、明日香の里周辺などを「万葉の道」全三巻の内該、当一冊を片手によく歩いた。日本の原風景との出会い、古代の歴史への想い、万葉集の歌への憧れなど今考えても心が躍るものがある。だいぶたつてから娘との旅

行で、懐かしの「山辺の道」を再び歩いたこともある。いつかまた訪れたい心の故郷と言ってもよいものだろう。

あつと、ここで「まもなく新横浜」のアナウンスがあり、筆をとめよう。おかげで時間をつぶすことができた。しかし、あー眠い！

帰宅すると二人は無事戻っていた。ヤレヤレだ。

さて先の話が続けよう。帰りは西明石からJRでそのまま新大阪に向かった。何もなければそれこそJR芦屋に途中下車してみるチャンスだった。しかしお会いしても奥さんとお話は今更悲しみを思っておこすことになるし、お慰めの言葉もないので、これまでわざわざ乗り換えてまでして訪問するには気が重過ぎたのが正直なところである。今回たまたま、連中の帰国の日になっていたので早く帰らねばと、訪問はまた次の機会に延ばすことにしてしまった。でもJRの電車の中から多少周辺の様子でも見られるだろうと期待の上ではあった。ところが案の定、またまた眠ってしまい、気がついたらそこを通り過ぎ既に大阪の駅になっていた。

夏草の六甲にいまも白き雲

漢点字との出会い

会員 木下 和久

会社の定年も目前に迫り、何か趣味のパソコンを生かした仕事がないだろうかと探していたとき、その少し前から視覚障害者のための録音朗読を始めていた家内が、仲間から教えられて点字をパソコン入力する仕事があるよ、と持って持ってきたのが横浜市の広報でした。

よく見ると「漢点字」という言葉が入っています。確か、点字というのはカナしか表せないものではなかったかと思っていたし、家内がライトセンタールの講習で貰ってきた点字表には、漢点字のことなど一言も書いてありません。どういうことかと思つて、その連絡先に指定されていた電話番号にかけてみたのが、吉田信子さんとの最初の出会いです。話を聞いているうちに、これは全く未知の漢点字の世界というものがあることを知り、更に詳しいことを知りたければ岡田さんに聞いてくれという話で、岡田さんとの電話による接触が始まりました。

最初の講習会が始まる前に吉田さんからは見本の漢点字文をパソコンでプリントしたものを頂きました。簡単な文章ですから、一通り眺めただけで大体の点字の成り立ちは分かります。これをもとにして、漢字と

漢点字の関係を推測して、コード対照表の一部を作ってみました。そして、このような漢点字をパソコンの画面に表示することも工夫して、グラフィックの表示を使えば何とか画面に表示できるということまでこぎつけました。この分ならそう大した苦労もせずに変換プログラムもできるのではないかと考えていました。

しかし、岡田さんにその話をすると、何かとてもそんな一筋縄で行くものではないと考えている様子で、何がそんなに難しいのか分からぬままに最初の講習を受け、それから何回かの講習を受けて、そのたびに仕入れる新しい知識を盛り込んで、プログラムの制作を続けて行きました。最初の3カ月ぐらいで、一応使えそうなプログラムができましたが、実際にプリンタを動かして、ちゃんとした漢点字文書を作るのは大変なものです。プリンタを動かすプログラムは、その前から吉田さんのご主人が作られたお手本となるプログラムがあつたので、それを改造する方向でやっていたのですが、そもそも考え方が全く同じではないため、なかなか思うようにプリンタが動いてくれません。何としてもプリンタを動かすには手元にそれがないとどうにもならないということで、バーサポイントD型というプリンタが吉田さんのお宅にあつたのを我が家を持ってきてしまいました。

それまで吉田さんがほとんど一人で定期的に発行されていた「横浜通信」を、私在家へ持ってきたプリン

タで打ち出すことになり、プログラムもそれに合わせて順次改良し、やつとスムーズに動くようになったのが、最初の講習から半年ぐらいたったときのことでしょうか。

振り返ってみると、それから後のプログラム開発の道は、決して平坦なものではありませんでした。カタカナや英文字、数字などの扱いが、意外に複雑だったり、いろいろの記号も時と場合によってそれにスペースをつけたいときがあるかと思えば、つけたくないときもあり、個々の問題を解決して行くのにはずいぶん長い時間がかかりました。

現在では最低限の問題はほぼ解決していますが、まだまだ改良すべき余地が残っています。最大の問題はウィンドウズ化でしょう。これができないと、最近の新しいパソコンでは使えないプログラムになってしまうのです。しかし、実際のところはその前にC言語での再開発を手がけているのが現状です。これは、必要な機能を折り込むために、今までのQB（クイックベインシク）では超えられない限界があるためです。

パソコンでのプログラム開発を趣味とする私にとつて、漢点字のソフト開発を手がけることができたことは何と幸せなことであつたかと、漢点字と、それに関わる沢山の仲間との出会いがあつたことに感謝している次第です。

ボランテニア“私”論 (補記)

代表 岡田 健嗣

過去二回(本誌六、八号)において、「ボランテニア活動」について考えて来ました。社会福祉の分野でのボランテニア活動が、その先見性と無償性に支えられて行なわれて来たこと、また今後ますます活発化して行くことを論じて来ました。

社会福祉におけるボランテニア活動とその対象者の関係は、資本主義経済の進展とともに拡大し変化して来ました。それは救貧から始まり、今日の社会的弱者(高齢者および心身障害者)に及びました。また、一九世紀以来の近代国家の成立と、とりわけ戦後の日本のような、急速な経済成長に伴って、行政の社会福祉へのコミットも、その一分野として行なわれるようになって来ました。社会からの求めにまずボランテニア活動が応え、それが行政に反映されて行く、またニーズの高まりと多様化が、ボランテニア活動にその実現を求める、そのような関係が成立しているように見えます。

そこで今回は、視覚障害者としての私が、これまでの読書をおして経験して来たものから、現在ある問

題点を考えてみたいと思います。

一九六〇年代、私は十代にいました。当時世界は、何時果てるとも知れぬヴェトナム戦争に倦んでいました。それは、東西の冷戦とその覇権、そして南北問題を絡めた世界の焦点でした。そのような状況下に、若者が世界の各地で反戦運動を展開し、権力と激しく対立して行きました。

フランスでは、後に『五月革命』と呼ばれる運動が起こって、サルトルを初めとする思想家、文学者、ジャーナリスト、文化人等を巻き込んで、大きなうねりとなって行きました。しかし、当時のドゴール政権の実力行使がそれを鎮圧し、運動は急速に力を失いました。

また同年、チェコ・スロバキアでは束の間の『プラハの春』と呼ばれる自由化の動きがありました。ソ連邦の指導するワルシャワ条約機構軍の進行という実力によって、その芽が摘み取られました。

アメリカでも、黒人の公民権運動の指導者の一人であったあのキング牧師が暗殺され、権力との対立が激化の一途を辿っていました。

我が国でも、学生運動の高まりから、東大安田講堂闘争に至り、学生と国家権力との対立が決定的となり

ました。そして、国家の実力行使と運動の政治化が、その終息を急がせました。

そんな時代、文化の面でも従来への活動に飽き足らず、新たな表現方法の摸索が試みられていました。寺山修司もその担い手の一人でした。

彼の名は、大変センセーショナルな響きを持って私の耳にもとどきました。しかし、それはテレビというメディアをとおしてのもので、競馬の解説であったり、過激な、何か黒々とした社会批評のようなものであったりして、テレビから聞こえてくる彼のあの独特の声調は、何か挑発するような、何か威嚇するような、固い日常の表層に何かを刻印しようとする力を持つてとどいていました。そのような彼の姿は、けして私にとつて受け入れ易いものではありませんでした。

しかし、寺山修司に関する情報も、間遠ではあつても少しずつとどくようになって、テレビの彼は、本当は詩人、歌人、劇作家であることが分かつて来ました。テレビから流れる彼の言葉も、実は“文学的”思考と表現意識に根ざしたものであることを知ったのでした。当時の視覚障害者の読書は、かなの点字から音声訳のテープへと移行しつつある時期でした。ちょうどポランティア活動への参加者も増え、私たち視覚障害者の読書も、徐々にその幅を広げることができました。

個人的なニーズにも応じていただけるようになって、私もその恩恵に浴した一人でした。

かなの点字から音声訳のテープへ、この移行は現在に至るまでおよそ三〇年つづいております。それだけに確かに私たちの“読書量”も飛躍的に増大しておりますし、個人のニーズへの対応にも、ポランティアの皆さまのご理解を得るようになって参りました。しかし、文学、とりわけ詩歌の分野は、この音声訳によつても「読書」に耐えているとは申せないように思われます。詩歌作品は、大変残念なことに、私の理解を超えた、手のとどかないところにあるものでした。そのようにして、寺山修司と私との距離が、むしろ遠離れた、いやその距離が明確になつてしまった、その理解の方法を持ち得ないことを思い知らされてしまったのでした。

この春、本会で漢点字訳したアンソロジー『短歌俳句川柳101年』を、横浜市中央図書館に納入させていただきました。この中に、寺山修司の短歌と俳句が収められております。私たちも、やつとその世界を垣間見ることができるようです。近年、寺山修司への関心の高まりを見せ、没後十五年を経た今日にも、彼は重い存在感を示しております。私も、叶う限り彼の作品に触れたいと思っておりますとともに、本誌テープ版

の読者諸氏には、是非同書をこ一読いただきたいと願つております。

以下、彼のプロフィールと作品の幾つかをご紹介致します。

《寺山修司（一九三五〜八三）青森県生まれ。詩人、劇作家、歌人。早大教育学部中退。青森高校在学中に俳句雑誌「牧羊神」を主宰し、中村草田男、山口誓子らの知遇を得る。五四年、『チエホフ祭』五〇首で短歌研究新人賞を受賞。ただし、十年ほどで短詩型からは離れ、その後の活動は多岐にわたる。演劇実験室「天井桟敷」主宰者。著作多数。また、死後に再び脚光をあび、復刻本がブームとなった。》

『田園に死す』より（短歌）

大工町寺町老母買ふ町あらずやつばめよ

生命線ひそかに変へむためにわが抽出しにある 一本の釘

暗闇のわれに家糸を問ふなかれ漬物樽の中の亡霊

いまだ首中らざりし縄たはねられ背後の壁に古びつつあり

川に逆らひ咲く曼珠沙華赤ければせつに地獄へ行きまし今日も
亡き母の真つ赤な鉢で梳きやれば山鳩の羽毛抜けやまぬなり

村境の春も錆たる捨て車輪ふるさとまとめて花いちもんめ
見るために両臉をふかく裂かむとす剃刀の刃に地平をつつし
われ在りと思ふはさむき橋桁に濁流の音うちあたるたび
屠夫らうたふ声の白眉棒となり荒野の果てにつき刺さり見ゆ

『花粉航海』より（俳句）

目つむりていても吾を統ぶ五月の鷹

ラグビーの頬傷ほてる海見ては

父を嗅ぐ書齋に扉を幻想し

地上とは数ならざるや木の葉髪

土曜日の王國われを刺す蜂いて

二階ひゞきやすし桃咲く誕生日

癌すすむ父や銅版画の寺院

暗室より水の音する母の情事

みなしごとなるや数理の鷹とばし

いもうとを蟹座の星の下に撲つ

寺山修司は、このような作歌・作句活動から、演劇やテレビ出演など多彩な活動を展開したのでした。漢点字で読むことで、私たちは、ここにきてそのほんの一部ではあっても、それを知る機会を得ることができ

たのです。かつて私が知っていた彼ではなく、表現者としての彼とその作品を知ることができるのです。

このことは、彼ばかりに言えることではありません。『サラダ記念日』の俵万智。大変なブームの中心にいた彼女も、しかし、いわば万葉から室町に至る和歌に精通し、また近現代短歌の一翼を担う実力をもって、あの歌集が編まれたのでした。現代の若い女性の心を詠ったあの歌集も、女性歌人、和泉式部や紫式部、一葉や晶子の系譜、あるいは日本の現代詩歌の中に位置付けられて読まれてもよいのです。短歌の世界でも、大変高い評価を受けておられます。

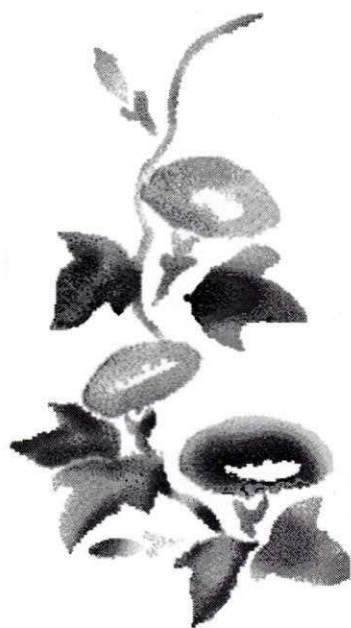
同様に、社会学者でフェミニストの上野千鶴子も、若い日、盛んに作歌活動を行なっておられました。現在彼女がものする文は、そのような文学的な下地、言語に対する彼女のセンスが作らせているものであることを見逃してはなりません。

このように多くの文筆家は、差はあれ、文学、それも詩歌への関心のない人はおられません。視覚障害者であっても、“読む”立場に身を置くのであれば、その点に思いを致さねばならないことは言うまでもありません。

環境の向上は、読書に関心を持つ視覚障害者を増加させました。しかし、視覚障害者にとつての読書の方

法論の構築には未だ至っていないといつてよいように思われます。音の表現は音で、映像の表現は映像で、そして文字の表現は文字で、本来そのように鑑賞されるはずですが。これまでの視覚障害者には、映像の表現を鑑賞することができないのと同様に、言語、それも文字の表現にもその方法が閉ざされていたと言えるのです。読書という言語のフィードバックが乏しければ、それだけ言語の表現能力の成長を妨げます。そのことは恐らく、日常の会話のレベルにまで及ぶに違いありません。

残念ながら私たち視覚障害者の読書は、市場から供給されることはありません。ほぼ百パーセント、ボランティア活動に依拠しなければなりません。それゆえなおのこと、私たち自身のニーズの追究と、その実現の方法の確立が求められるのではないのでしょうか。



鳥、地には獸、水には魚、そして地や水の底を這うものを「むし」と呼んだのでしょうか。時にはその中に人もまじって。

飛 (𠂇 𠂇) 鳥が左右に羽を広げた形を表わした象形文字。
音は「ひ」、訓は「とぶ」。

漢点字ではその羽を広げた形を「十」ととらえて (𠂇 𠂇)、右側に音の「ひ」の点字符号 (𠂇 𠂇) を当てて構成されました。

水 (𠂇) 流れる水を象った象形文字。音は「すい」、訓は「みず」。

漢点字は (𠂇)、1マス漢字。部首としては (𠂇 𠂇)、「さんずい」として水に関係する漢字を形成します。しかしこの「さんずい」は、それを含む漢字が大変沢山ありますので、左右を逆にして (𠂇 𠂇) としたり、(𠂇 𠂇) の点字符号を用いたり、またその左右を逆にして (𠂇 𠂇) としたりもします。

1マス漢字の (𠂇) は「氷」ですので、この符号は本来「にすい」ですが、その数が少ないので「さんずい」の1部にも当てられました。

「さんずい」を含む漢字は、

“河” (𠂇 𠂇)	“活” (𠂇 𠂇)	“消” (𠂇 𠂇)
“沢” (𠂇 𠂇)	“酒” (𠂇 𠂇)	“洋” (𠂇 𠂇)
“汗” (𠂇 𠂇)	“清” (𠂇 𠂇)	“浄” (𠂇 𠂇)
“漁” (𠂇 𠂇)	“油” (𠂇 𠂇)	

「水」が下に付く字は、

“泰” (𠂇 𠂇) “泉” (𠂇 𠂇)

「にすい」の漢字は、

“次” (𠂇 𠂇) “凍” (𠂇 𠂇) “冶” (𠂇 𠂇)
“凝” (𠂇 𠂇)

音 (𠂇 𠂇) “言”の口の中に・印を入れた形の会意文字。

「言」は、はっきりとした言葉を発する意の会意文字で、「音」は、その口の中にもものを入れて、はっきり発音できずくぐもった声を発することを意味しています。漢点字では、この会意文字の成り立ちを採らず上の部分を「立 (𠂇 𠂇)」、下の部分を「日 (𠂇 𠂇)」と見て、(𠂇 𠂇) としました。

「音」を含んだ漢字は、

“暗” (𠂇 𠂇) “諳” (𠂇 𠂇) “韻” (𠂇 𠂇)

漢点字ってどんな字？ 8 ～漢点字で読んでみよう 2～

古池や蛙飛びこむ水の音 芭蕉

前号に引き続き、この句に用いられている漢点字をご紹介します。

蛙 (𠄎𠄎𠄎) “蛙” はかえるの鳴き声を表わす音符。

漢点字では〈𠄎𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎〉、単独には人名として用いられることが多いので3マス漢字となりました。それが部首となりますと〈𠄎𠄎 𠄎𠄎〉または〈𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎〉の符号で表わされます。この字の意味は、王から賜った貴族の印、あるいは与えられた領土を表わす器。
 「蛙」が部首となっている字には、
 “蛙” (𠄎𠄎 𠄎𠄎) “蛙” (𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎)
 “蛙” (𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎) など。

「蛙」はむし？

現代人にとっての「むし」は、昆虫やくもなど陸上の甲殻類かみみずのような環形動物ではないでしょうか。しかし、漢字の側からは随分違った世界が見えて来ます。
 「蛙 𠄎𠄎 𠄎𠄎」も「蛇 𠄎𠄎 𠄎𠄎」も「蜥蜴 𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎」(とかげ)も虫偏、「蟹 𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎」(かに)も「蝦 𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎」(えび)も「蛤 𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎」(はまぐり)も「蛸 𠄎𠄎 𠄎𠄎」(たこ)も虫偏、おまけに「蝙蝠 𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎」(こうもり)まで虫偏です。

「虫 𠄎𠄎 𠄎𠄎」の原字は「蟲 𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎」、沢山わきだした 蛆 𠄎𠄎 𠄎𠄎 𠄎𠄎 (うじ) 虫の象形で、「虫」はその略体として用いられました。本来は別字で、「虫」は〈まむし〉の形の象形文字。

「虫」は動くものの総称で、羽虫は鳥、獣虫は獣、甲虫は亀、鱗虫は魚、そして人は裸虫と呼ばれました。いやいやそればかりではありません。苦虫、腹の虫、癩の虫もいれば、弱虫、泣き虫、本の虫、と人の中にいたり人そのものが虫になったりもします。

『堤中納言物語』の『虫めずる姫君』には、〈長虫(ながむし)〉が出て来ます。これは名にし負う “へび” のこと、動くもの全ての意ばかりでなく、確かに蛇も「むし」の仲間に数えられていたのです。空には

生（ウマ）るるも死ぬるも一人盆の月

生（ウマ）るるも死ぬるも一人盆の月

矢島 一枝

矢島 一枝

今年もお盆がやってきた。私の身近なひとであの世に旅立って行く方がこのごろめつきり多い。この作品は66才の女性の作。現在では女性で60才台ではまだ人生これからというお年。おそらく早くご主人を亡くされたのかも。私も他人事ではない。いつお迎えが来てても良いように準備しなければ。（朔）

紅顔のままの遺影や雲の峰

紅顔のままの遺影や雲の峰

小倉 朔太

小倉 朔太

終戦記念日が近づくと思出す人が私のアルバムに納まっています。二十歳（ハタチ）になるかならないかの、まだあどけなさの残った特攻服姿のK君。終戦を待たずに彼は夏雲のかなたに飛んで行き二度と帰って来ませんでした。戦争は決してしてはいけません。（朔）

*このコーナーの解釈等に対する御意見、ご質問をお待ちしております

編集後記

本文の中にもあります通り、今年度横浜市中心図書館へ納入する漢点字訳書の作品が決定いたしました。また、同職員の斉藤様にも原稿を頂戴しました。この場をお借りして御礼申し上げます。

今後、多くの方々に漢点字訳書をご提供できればと考えております。ご希望の書籍がございましたら、是非ともご連絡下さいますようお願い申し上げます。

原稿を募集いたします。本誌のご感想・御意見、ボランティアについて等、FAXまたは、Eメール（ラポールネット/RAP01407）でお願いします。

次回の発行は十月十五日です。

ご意見・ご感想をお寄せ下さい。

TEL・FAX 045(261)1723

宗助 悦子

*本誌（活字版・テープ版・ディスク版）の無断転載はかたくお断りいたします。